

Title	Paul Alphantery et Alphonse Dupront La chretiente et l' ideede Croisade, Les premieres croisades. ("Evolution de l'Humanite" XXXVIII. Albin Michel., 1954)
Sub Title	
Author	森岡, 敬一郎(Morioka, Keiichiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1956
Jtitle	史学 Vol.28, No.3/4 (1956. 3) ,p.150(428)- 151(429)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19560300-0150">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19560300-0150</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 書 評

Paul Alphandéry et Alphonse Dupront

### La chrétienté et l'idée de Croisade

Les premières croisades.

(“Evolution de l'Humanité” XXXVIII. Albin Michel. 1954.)

本書は優れた宗教史學者であつたアルファンデリー教授の死後廿一年、同教授の遺稿をデュプロンが整理し公刊したものである。アルファンデリーは、シルヴィアン・レヴィ、アレクサンドル・コワレ等と同じく、エコール・デ・オート・ゼテュードの出身者であり、共に宗教史の研究に従事していた學者であつた。

十字軍に關する幾つかの研究が、最近公にされている。その代表的なものとして、René Grousset, Histoire des Croisades et du royaume franc de Jérusalem. 3 vols. Paris, 1934-36 や Steen Runciman, History of the Crusades. 1952~, Cambridge. (現在まで四巻刊行)の如きを擧げ得よう。此等の研究、特に後者は極めて立派な叢積であると思はれる。しかしその主點は戦争

や交通などのむしろ外的事實に置かれる傾のあることは否定し得ない。此に反して、本書は、正に標題の示す如く、十字軍の精神的的研究であると言へよう。即ち十字軍に参加した人々を内側から動かして行つたものが何であつたか、十字軍士の所謂集團心意 (mentalité collective) の研究なのである。従つて十字軍の外的事實に關する敘述は最少限にとどまつてゐる。

本書は三部に分れ、第一部に於いては、十字軍の前提となつた諸事象、巡禮の慣習、經濟、政治、社會的な諸狀況、就中、一千年直前に起つた終末論的な民間思想運動が取上げられ、ここにヨーロッパの一般民衆の間に自生的に十字軍熱をささへるもの發生して來る過程が巧に描出されてゐる。

次いで第二部に於いては、第一回十字軍が取扱はれてゐる。しかし乍ら兵員、糧食その他の輸送、戦争、政略などの所謂外的事實は、特にこの部分に於いては、最少限に壓縮せられ、日常些末の現象にも神の意志を看取し、奇蹟を経験した十字軍士にまつわる挿話を通じて、十字軍士の心意、十字軍を動かしてゐた熱烈な宗教的な夢を捉へようとしてゐる。

最後に第三部に於いては、第二回十字軍が取扱はれてゐる。ここでは、本來の十字軍的精神が次第に稀薄となり、十字軍が單なる困難を伴う巡禮と化し、この困難の故に尊重されるものとなつて行く過程が取扱はれてゐる。

本書の内容はここで終つてゐる。以後の十字軍の研究も、本叢書以外から公刊せられると言う。これらの諸冊は、數多い十字軍研究書中であつて、十字軍と言ふよりも十字軍士の内的精神史として特異の性格を有し、一つの基準的研究と看做されるであらう。

(森岡敬一郎)

Thompson; World History from  
1914 to 1950

1954, London

戦後流行した世界史の記述は幾多の問題を含みつゝもともかく一應の格好を整えて來たことは事實である。編年及び地理上の區分等については先づ一通りの定つたコースが置かれたと云つても過言ではないと思ふ。然し世界史の記述に當る歴史家の態度方法については必ずしも同様ではない。對象の廣さから見れば勿論多くの問題が提起されるのが當然であるが世界史家の扱ふ對象或ひは史的方法と云つたものに關する反省が存外少かつたことも事實である。此の點に關して若干の史家例えばカー、アロン、トムソン等は僅かではあるが世界史に思ひを致してゐる吾々に光明を與えてくれたと云えるのではないであらうか。此處に紹介するトム

ソンの世界史は斯様な意味に於いて云はば實驗的な一つの世界史を打ち建ててゐるとも云えよう。

トムソンの主張を序文を借りて紹介すると先づ少くとも二十世紀の三十年代以後の最近世ともなれば、國別乃至は大陸別の歴史を描くのは無意味であり、地球全體が一つの綜合的な記述になるべきであるとし、年代記的な所謂個別的記述は近代の世界史に關する限り問題にならないとしてゐる。これによつて世界史の構成は、時代別に關する限り統一的な體裁はとり得ず、少くとも近世に關しては全世界が一つの綜合的な視點から捉えらるべきであり又世界史の構想を抱く以上、二十世紀以降の近世のみが世界史の名に値するものだとされてゐるのである。即ち、トムソンは世界史と云ふ以上は、各大陸間又は、各國家間の恒久的且恒常的な相互關係が創造される時代のみが記述の對象とされるべきであり、此の意味に於いて斯る相互關係を創らなかつた時代の事件は全て記述の對象にはならず結局、最近二百年間の年代のみが斯る關係を創つた意味に於いて唯一の對象であり、此度にこそ世界史が成立すると云ふ。具體的にはヨーロッパ勢力の擴大とその全世界に占める優越及び、そのヨーロッパ自身及び他の五大陸への影響が對象になると云ふのである。換言すれば、近代文明及び通信組織の發展による時間概念の變化それ自體も世界史の構成記述の綜合的性格を強化して居り。特に現代史を按ずる場合、フランスの